

# 明治期の北前船

明治期に入り小松地域の北前船は、さらに発展の気運を迎えた。



白八幡宮奉納船絵馬(青森県鮎ヶ沢町 白八幡宮所蔵) 明治27年正徳丸 安宅町 玄田権治良 和船(弁財船)に西洋形帆装を導入した合の子船で、明治20年(1887)頃より出現する。同じ頃より、洋帆船も出現するが、小松地域では和船が主体であった。

明治二年(一八六九)正月、安宅町は小松町奉行所に渡海船舶往來切手九二枚の発行願をだした。実動数は不明であるが、新興船主の登場をうかがわせる。明治十年代前半には、一五〇石以上の渡海船舶主・船頭・船荷問屋で構成される安宅港船道組合が組織され(明治二十二年の組合員は五三名)、これにともない船業者の船組も組織され、安宅の港湾組織が整備された。

安宅では船荷問屋が十数家あり、明治三十年船荷問屋合資会社が設立された。北前船主は明治二十年代約五〇家、明治三十年代以後も約四〇家が確認される。また、小松町では酒井家・小杉屋・岩崎屋・清水屋など十数家、長崎・浜佐美・浮柳の各村に数家の船主がいた。これら船主の多くは、北海道

と日本海沿岸を経由して瀬戸内海・大阪を結ぶ交易を活発に行っていた。



明治時代後期の安宅港(小松市安宅町 沖家所蔵)

## 安宅港の移入貨物

	銅鮭	鮭搾粕	砂糖	塩	石灰	木材	薫灰	石油	石炭	コークス
明治26年	90,000	40,000	24,800	10,000	38,000			14,000		
明治28年	11,900	46,000	26,500	10,700	52,000			15,400		
明治30年	75,000	52,000	15,700	15,000	75,000			14,300		
明治32年	75,000	82,000		18,000	78,000		20,000	7,000		
明治33年	196,000	170,000		20,000	84,000	36,000		34,000		
明治34年	154,500	140,000		18,000	84,000	24,000		21,000		
明治36年	57,223	101,464		4,000	49,500	9,000	7,500	10,500	2,450	13,000
明治37年	57,000	99,000		4,000	49,500	9,000	7,500	15,050	3,500	13,000
明治39年	60,000	108,000		9,500	49,500	10,500	10,500	12,550	3,500	23,500
明治41年	60,000	174,000		4,000	32,000	12,700	3,000	17,500	11,500	12,000
明治43年	80,004	168,500			55,500	44,300	1,785	13,300	2,240	30,420

『石川県統計書』より作成。主要品目と移入額。単位は円。

主要な積出地は、銅鮭・鮭搾粕は北海道、砂糖は大阪・瀬戸内海、塩は瀬戸内海・能登、石灰は伊予・若狭・敦賀、木材は能登・佐渡・隠岐・東北・北海道、薫灰は能登、石油は新潟、石炭は唐津・若松、コークスは唐津・若松・大牟田となっている。

## 安宅港の移出・移入額

明治	26年	28年	30年	31年	33年	35年	37年	39年	41年	43年
移出	353,500	411,200	265,550	84,005	100,200	57,900	49,500	60,325	60,590	56,050
移入	238,800	189,300	286,300	244,105	604,200	304,368	279,550	309,080	348,770	407,078

『石川県統計書』より作成。単位は円。

安宅では、松村家は和船四艘・洋帆

船二艘、明治末期から大正期に安宅では唯一汽船四艘を所有し中国天津に就航する、安宅港最大の北前船主であった。木下家は船荷問屋・海運業を営んだが、明治十九年に設立された金石と敦賀を結ぶ加能汽船会社の安宅代理店として、安宅港への寄港に対応して船改良組を新設し、同会社が三十三年解散するまで、貨客の輸送にあたった。米谷家も船荷問屋・海運業を営んだが、明治二十年代に廃業し、倉庫業に転換し、二十四年には北國銀行の前身の一つ、米谷銀行を創業している。

安宅港の移出品は、米・莫塵・豊表（小松表）・銅・羽二重・陶磁器・煎茶・瓦・小麦が多く、移入品は表示以外のものに、鉄類・油粕・木炭・昆布・藍玉・薪材・竹材・素麺などがある。

明治三十年代北陸線の開通や日本郵船会社の汽船運航がふえ、北前船交易に強く影響した。銅・羽二重・煎茶・砂糖は鉄道輸送に転換し、明治三十六年伏木港に陸揚げされた鮭魚肥八六二ト（約八万円）が小松駅に輸送されて



引札 木下傳二(加賀市 北前船の里資料館所蔵)

いる（「鉄道局年報」）。安宅港の移出額は明治三十一年以後激減する。一方、移入額は明治三十三年最高額を示し、その後漸減するが、鉄道未開通地域との交易、地廻り海運（小廻船）の拠点として、なお一定の役割を担っているのである。また少数ながら、安宅の松村家・木下家・瀬戸家・矢地家などは、大正初期でも大阪・北海道などの遠距離交易を継続している。（清水郁夫）